



新年ご挨拶

学校法人 鶴学園
理事長・総長 鶴 衛

平素から鶴学園の教育運営に多大なるご理解とご協力を賜っております皆様方に、遅ればせながら新年のご挨拶を申し上げます。皆様におかれましては「平成」最後の新年を健やかにお迎えになられたこととお喜び申し上げます。

今年の干支は「己(つちのと)亥(い)」になります。「己」は、もともとは糸偏と組み合わせた「紀」を省略したものだそうです。「己」は「糸巻き」を表し、糸をくるくると巻き取って「正す、おさめる」、つまり糸のもつれを正して筋を通すことを意味します。

「亥」は、植物の種を意味する「核」の右側の旁(つくり)部分で、何かを産もうとしている、エネルギーをはらんでいる状態だそうです。物事の中心となる大切なところは核心と言います。「己亥」の今年は、紀律を正して筋道を通し、爆発的なエネルギーでもって次なる発展へと繋げる重要な年である、と言えるでしょう。

さて、昨年を振り返ってみますと、うれしいこと、残念なこと、いろいろありました。身近なところでは、プロ野球の広島東洋カープが球団史上初のリーグ3連覇を達成したものの、34年ぶりの日本一は叶いませんでした。プロサッカーJ1のサンフレッチェ広島は前年のJ2降格危機から復活して首位を独走しながら、後半に失速してしまいました。喜びの半面、すっきりしない気持ちが残りました。「そだねー」と、うなずかれた方も多いのではないのでしょうか。

山口県の県立高校を卒業した京都大学特別教授の本庶佑氏が、ノーベ

ル医学・生理学賞を受賞したのは明るいニュースでした。本庶先生は、免疫に関わるたんぱく質「PD-1」を発見し、新型のがん治療薬「オプジーボ」の開発に貢献されました。そして授賞式が行われるスウェーデン・ストックホルムで会見し、「2050年までに、ほとんどのがんが治療できるようになる」とがん治療の未来を語られました。この未来予想が少しでも早く現実のものとなり、がんでつらい闘病生活を送る方や周りで支える家族の方々など、多くの人たちの救いとなることを願っています。

一方、「今年の漢字」に「災」が選ばれたように、昨年は台風や地震、集中豪雨など自然災害が多発しました。中でも私たちに衝撃だったのは、平成最悪と言われる、7月の西日本豪雨災害です。広島県内各地で土砂崩れや土石流によって民家が跡形もなく壊されたり道路が寸断されたりして、全国最多の109人もの尊い命が犠牲になりました。いまだに行方不明の方もいます。災害から半年が過ぎましたが、本格的な復旧にまだ相当の時間がかかる地域もあります。被災者の方々が一日も早く平穏な日々を取り戻されるよう祈るばかりです。

ただ、このたびの災害で私は、困ったときは助け合う、人間が持つ本来の姿にあらためて心を打たれました。災害直後から、警察、消防や自衛隊による行方不明者の捜索や復旧活動に加え、土砂撤去や生活支援に全国からボランティアが続々と駆け付けました。

わが国でボランティアの名前が広まったのは、1995年1月17日に起きた阪神・淡路大震災からです。2011年3

月11日の東日本大震災をはじめ、自然災害でボランティアの活躍は広がりを見せています。後片付けや清掃だけでなく、がれきの中から泥にまみれた写真や人形など思い出の品を見つけ出し、丁寧に汚れをぬぐって持ち主や遺族に返す活動もその一つです。

確かに重機などで土砂やがれきを取り除く復旧作業は人手も少なくて済みませんが、「思い出」までは救い出すことができません。「思い出探し」は「大切な物に違いない」「行方を捜しているのでは」と、人を思いやる心がなせる業なのです。

これからの時代、人工知能(AI)やロボットがどんなに発達しようとも、いや発達すればするほど人の心が重要になると思います。いかに人間力を備えた人材を育てるかが問われています。私たち私学関係者の役割もそこにあると言っても過言ではありません。

折しもわが国は本格的な人口減少時代を迎えています。今後、18歳人口は2030年に約100万人、2040年には88万人まで減少すると推計されています。文部科学省の試算によりますと、2040年の大学進学者数は約51万人で、現在の8割程度に減少します。中央教育審議会が昨年11月下旬、文部科学大臣に答申しました「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」は、こうした危機感が背景にあります。

私たちが目指すべき将来像は中教審答申に次のように描かれています。「多様なミッションに基づき、学修者が『何を学び、身に付けることができるのか』を明確にし、学修の成果を学修者

が実感できる教育を行っていること。このための多様で柔軟な教育研究体制が各高等教育機関に準備され、このような教育が行われていることを確認できる質の保証の在り方へ転換されていること」。つまり、AI時代やグローバル時代を生きていく能力を獲得するために画一的な教育から脱却し、「多様な価値観を持つ多様な人材が集まることにより新たな価値が創造される場」=「多様な価値観が集まるキャンパス」になる必要がある、というのです。

これらは鶴学園が昔から取り組んできた、あるいは取組もうとしている改革の方向性にほかなりません。私たちは学園不変の教育理念である建学の精神「教育は愛なり」及び教育方針「常に神と共に歩み社会に奉仕する」のもとで、しなやかに、そして大胆に、自信を持って改革を進めていきたいと思えます。

広島工業大学では現在、堅実な学力と豊かな人間力に満ちた技術者の養成に向け、教育プログラム「HIT教育2016」を推進しています。スタートさせてまだ3年ですが、社会は急速かつ大きく変化しています。社会と繋がる実践的学びの展開などにより、地域社会や国際社会に貢献する、高い能力と倫理観を持った技術者の養成が急務になっています。そこで、「HIT教育2016」を進化させた新たな教育プログラム「HIT.E ▶ 2024」の策定を進めています。

広島工業大学専門学校は、全7学科が文部科学省の「職業実践専門課程」に認定されて5年になります。企業

連携による課題解決型教育の充実や新しい技術分野への教育に取組み、こうした実践が評価されて平成30年度の職業能力開発関係厚生労働大臣表彰を受けました。これからも社会・産業ニーズに即応した多様な教育を柔軟に展開する改革の継続が欠かせません。

そして何より、広島工業大学高等学校や広島なぎさ中学校・高等学校、なぎさ公園小学校は、次期学習指導要領への対応や30年ぶりの大改革となる大学入学共通テストの対策といった大きな課題に取組まなければなりません。しかも、本学園の各校が立地する広島市の0歳人口は近年漸減を続けて昨年、ついに1万人を切りました。この数字は近い将来の学齢人口になります。私立学校にとって地域の学齢人口減は死活問題です。

いかに入学者を確保するか、学園全体で心一つにして知恵を絞らなければなりません。状況が困難であればあるほど、私たちは基本に立ち返り、「選ばれる教育」「選ばれる学校づくり」に一層力を注がなければなりません。つまり、鶴学園ならではのオリジナル教育に磨きをかけ、さらに力強く推進していかなければならないのです。

昨年秋、なぎさ公園小学校が、今春社会に巣立つ1期生を中心にした卒業生に対しインタビューを行いました。それが「なぎさ教育進化論I〜先輩たちの現在〜」という名のリーフレットになりました。

筑波大学4年のU君は「失敗こそ成長の源」と考える自分の基礎をつくってくれたのは「好きなことに向かうエネ

ルギーを損なうことなく、のびのびと育ててくれた」小学校教育であると語ってくれました。ミラノのボッコニ大学に留学する神戸大学3年のY君は「小学校時代は好きな事ばかりに夢中だった気がします。それを止められた記憶がありません。そのことが、夢を諦めない強い気持ち(継続力)や、そのための勉強を楽しみと思えるベースになっています」と感謝の気持ちを寄せています。北京大学への留学が決まったことを報告してくれた同志社大学2年のKさんは「好奇心旺盛でチャレンジを恐れない女の子に育ててもらいました」と振り返っていました。「この世界をみんながもっと住みやすい世界に変えたい」と小学校5年生のとき図書館で偉人伝を読みながら考えていたというSさんは、「自分自身が生き生きと取組める分野で誰かの役に立ちたい」と高校1年の秋、カリフォルニアの高校に転校、現地の大学で演劇を学んでいます。

なぎさ公園小学校で学んだ子どもたちが発する言葉に、あらためて教育とは子どもたちの人生、未来に責任を負わねばならない仕事であると考えさせられます。「教育は愛なり」とはそういうことだと思います。同時に、私たちの想いが確かに彼らに届いていたのだと、うれしく感じた次第です。

鶴学園の教職員一同、逆境にひるむことなく、心機一転、新しい時代にふさわしい教育づくりにまい進してまいります。皆様からの益々のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。新年のご挨拶といたします。